

束の間に雲を割り切る 青空を

そすい

疎水に流す 京の恋橋

令和六年一月十七日

大中臣正比呂



琵琶湖疎水は京都の市中を潜り、伏見稻荷の近くまで流れてくる。

夏の頃の風情とは異なり、水路の際を寒空の下に歩くと、

ちょっと切ない気分になる。風は冷たいのだ。

寒そうなカメラマンの私に彼女は懐炉を買ってくれた。

これをお腹に入れて伏見稻荷を目指そう。